

達第三百三十三號

潜水艦艦名ヲ左ノ通變更ス

昭和十六年十一月一日

海軍大臣 嶋田繁太郎

伊號第二十七潜水艦ヲ伊號第二十六潜水艦トス
伊號第二十九潜水艦ヲ伊號第二十七潜水艦トス
伊號第三十一潜水艦ヲ伊號第二十八潜水艦トス
伊號第三十三潜水艦ヲ伊號第二十九潜水艦トス
伊號第三十五潜水艦ヲ伊號第三十潜水艦トス
伊號第三十七潜水艦ヲ伊號第三十一潜水艦トス
伊號第三十九潜水艦ヲ伊號第三十二潜水艦トス
伊號第四十一潜水艦ヲ伊號第三十三潜水艦トス
伊號第四十三潜水艦ヲ伊號第三十四潜水艦トス
伊號第四十五潜水艦ヲ伊號第三十五潜水艦トス

達

六七五

1701

海軍諸例
則登載

達

六七六

伊號第四十七潜水艦ヲ伊號第三十六潜水艦トス
伊號第四十九潜水艦ヲ伊號第三十七潜水艦トス
伊號第七十六潜水艦ヲ伊號第七十六潜水艦トス

達第三百三十四號

明治四十二年達第六十九號中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月一日

海軍大臣 嶋田繁太郎

由良港ノ項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

小松島灣 大崎ヨリ於龜瀬燈臺ノ連結線、於龜瀬燈臺ヨリ那賀川尻ノ北端ヲ連結スル線以內

(賭例則卷三、三三八頁參照)

達第三百三十五號

從前ノ規定中左ノ上欄ノ潜水艦トアルハ各共ノ相當下欄ノ潜水艦トス

1702

達

伊號第二十七潜水艦	伊號第二十九潜水艦	伊號第三十一潜水艦	伊號第三十三潜水艦	伊號第三十五潜水艦	伊號第三十七潜水艦	伊號第三十九潜水艦	伊號第四十一潜水艦	伊號第四十三潜水艦	伊號第四十五潜水艦	伊號第四十七潜水艦	伊號第四十九潜水艦	伊號第七十六潜水艦
伊號第二十六潜水艦	伊號第二十七潜水艦	伊號第二十八潜水艦	伊號第二十九潜水艦	伊號第三十潜水艦	伊號第三十一潜水艦	伊號第三十二潜水艦	伊號第三十三潜水艦	伊號第三十四潜水艦	伊號第三十五潜水艦	伊號第三十六潜水艦	伊號第三十七潜水艦	伊號第七十六潜水艦

六七七

1703

達

昭和十六年十一月一日

海軍大臣 嶋田繁太郎

六七八

1704

達第三百三十六號

艦營需品定額表中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月六日

海軍大臣 嶋田繁太郎

水雷長 主管
機雷長

區	別	類別	番號	區供給	品名	數稱	摘	要	記	事
追加	消耗品	四	五		特種耐寒潤滑油	立	水雷用		新規設定	
同	同	四	六		特種精密機械油	個	〇、〇三立瓶入 縦筒機用		同	
同	同	四	七		一號メタノール	立	水雷用		同	
同	同	四	八		二號メタノール	立	同		同	
同	同	四	九		耐寒グリース	庇	同		同	

達

六七九

1705

海軍諸例
則登載

達第三百三十七號

雇員傭人規則中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第三條表中水栓手ノ項「鹿島航空隊」ノ下ニ「館山砲術學校」ヲ加フ

(諸例則卷二下 七七九頁参照)

達第三百三十八號

燃料經理規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第二十一條 削除

様式第十四號中

								亡失(.....)
								數量
								單價
								代價
								價

ヲ

								數量
--	--	--	--	--	--	--	--	----

ニ改ム

遠

六八一

1706

達

様式第十七號其ノ一中備考第三號中「及代價」ヲ削ル

様式第十七號其ノ二中

附則

本達ハ昭和十六年四月一日ヨリ之ヲ適用ス

供給額合計	
数量	代價

ヲ

供給数量

ニ改ム

六八二

1707

海軍諸例
則登載

達第三百三十九號

昭和十六年達第三號中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第一號中「海兵團ヲ除キ」ヲ「大竹海兵團以外ノ海兵團ヲ除キ」ニ、第二號ヲ左ノ如ク改ム

一、海兵團（大竹海兵團ヲ除ク）ニ勤務スル者

横須賀海兵團（横須賀第一海兵團及横須賀第二海兵團共）

吳海兵團

佐世保海兵團（佐世保第一海兵團及佐世保第二海兵團共）

舞鶴海兵團

附則

本達ハ昭和十六年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

（參照）昭和十六年達第三號ハ兵軍制ノ前章記號ノ件ナリ

達

六八三

1708

海軍諸例
則登載

達第三百四十號

警備府處務規程左ノ通定ム

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

警備府處務規程

鎮守府處務規程(第九條、第十條、第二十條及第二十六條ヲ除ク)ハ警備府ニ之ヲ準用ス

附則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

要港部處務規程ハ之ヲ廢止ス



大正元守邊カヲカキテ

(諸例則卷一、一五五頁、四四三頁參照)

海軍諸例
則登載

達第三百四十一號

警備府處務規程左ノ通定ム

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

海軍諸例
則登載

商港警備府處務規程

鎮守府處務規程（第九條、第十條、第二十條及第二十六條ヲ除ク）ハ商港警備府ニ之ヲ準用ス

附則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

阪神海軍部處務規程ハ之ヲ廢止ス



昭和十五年達第四号

（諸例則卷一、一五五頁、四五二ノ一頁参照）

達第三百四十二號

旅順警備府處務規程左ノ通定ム

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

旅順警備府處務規程

第一條 鎮守府處務規程（第九條、第十條、第二十條、第二十三條及第二十六條ヲ除ク）ハ旅順警備府ニ之ヲ準用ス

達

六八五

1710

第二條 主計長ハ左ノ事務ヲ掌ル

一 主計科士官以下ノ勤務及教育訓練ニ關スルコト

二 旅順警備府及其ノ附屬艦船部隊（主計科ノ士官及特務士官ヲ置カレザルモノ）ノ會計給與ニ關スルコト

三 旅順警備府ニ配備シタル艦營需品、燃料、被服及糧食ノ出納、保管及供給ニ關スルコト

第三條 海軍港務部處務規程第一條ノ規定ハ旅順警備府港務部ニ之ヲ準用ス

第四條 附タル下士官及兵ハ警備府内ニ起臥セシメ其ノ紀律ハ軍艦ノ例ニ準ズ

附 則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

旅順要港部處務規程ハ之ヲ廢止ス



昭和十六年十一月二十日

（諸例則卷一、四五〇頁參照）

海軍諸例
則登載

達第三百四十三號

鎮守府處務規程中左ノ通改正ス

海軍諸則
登載

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第一條中「海軍軍令部」ヲ「軍令部」ニ改メ「海軍艦政本部」ノ下ニ「海軍航空本部、海軍施設本部」ヲ加フ

第十六條中「海軍區」ヲ「警備區」ニ改ム

附則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

(諸例則卷一、一五五頁參照)

達第三百四十四號

海軍警備隊職員服務規程左ノ通定ム

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

海軍警備隊職員服務規程

第一條 司令官又ハ司令ハ諸般ノ部署ヲ定メ之ニ依リ銳意部下ヲ訓練シ又常ニ之ガ適否ヲ研究シ共

達

六八七

1712

ノ改善ヲ圖ルベシ

第二條 司令官又ハ司令ハ隊ノ内規ヲ制定シ所屬長官ノ認可ヲ受ケ之ヲ施行スベシ

第三條 司令官又ハ司令ハ衛兵ヲ組織シ軍港境域又ハ所在地附近ノ海軍官衙、倉庫等ヲ守衛セシム
マシ但シ現ニ海軍守衛アル官衙、倉庫等ハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 司令官又ハ司令ハ其ノ擔任スル區域ノ防禦及警備ニ關シ所在海軍各部ト連絡シ部外關係各部ト氣脈ヲ通ズベシ

第五條 司令官又ハ司令ハ海軍警備隊令第六條ノ規定ニ依リ部下職員ニ代理ヲ命ジタルトキ又ハ之ヲ解キタルトキハ士官ニ在リテハ之ヲ海軍大臣ニ報告シ特務士官及准士官ニ在リテハ之ヲ本人在籍ノ鎮守府司令長官ニ報告又ハ通報スベシ

第六條 海軍警備隊職員海軍警備隊令第七條ノ規定ニ依リ司令官又ハ司令ノ職務ヲ代理シタルトキハ之ヲ海軍大臣ニ報告スベシ

第七條 司令官又ハ司令ハ諸施設ノ保存ニ注意シ其ノ増築、改築又ハ修繕ヲ要スルトキハ之ヲ所屬長官ニ具申スベシ

第八條 前各條ニ規定スルモノノ外艦船職員服務規程ハ適用シ得ル限り海軍警備隊職員ニ之ヲ準用

ス

附則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

達第三百四十五號

海兵團職員處務規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第二條 削除

第四條及第七條中「後備役」ヲ「第一國民兵役」ニ改ム

附則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

(諸例則卷一、三六一頁參照)

達

六八九

1714

海軍諸例
則登載

達

達第三百四十六號

明治四十一年達第百十六號中左ノ通改正シ昭和十六年十一月八日ヨリ之ヲ適用ス

昭和十六年十一月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

佐世保海軍刑務所ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

舞鶴海軍刑務所

一

四

(諸例則卷一、三四四頁参照)

六九〇

1715

達第三百四十七號

燃料經理規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十四日

海軍大臣 嶋田繁太郎

別表第一中普通揮發油ノ項ヲ左ノ如ク改ム

普通揮發油		
一號普通揮發油	一普通	G ₁
二號普通揮發油	二普通	G ₂
三號普通揮發油	三普通	G ₃
「ガソリン」機械用（近寒用）		石油機械用 自動車用
「ガソリン」機械用		

（會計法規類集四卷二五三頁參照）

達

六九一

1716

海軍諸例
則登載

達第三百四十八號

燃料試驗規格中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十四日

海軍大臣 嶋田繁太郎

燃料試驗規格中二號普通揮發油ノ規格ヲ左ノ如ク改メ同品ノ規格ノ次ニ三號普通揮發油ノ規格ヲ左ノ如ク加フ

二號普通揮發油

本揮發油ハ水及沈澱物ヲ混ゼズ但左ノ各號ニ適合スルモノタルベシ

一、反應（試驗法第三號）中性

二、分溜性狀（試驗法第一二號甲第一法）

一、一〇%溜出溫度 攝氏 八五度以下

二、五〇%溜出溫度 攝氏 一五〇度以下

三、九〇%溜出溫度 攝氏 二一〇度以下

四、九七%溜出溫度 攝氏 二二五度以下

達

六九三

1717

三、硫 黄（試験法第八號乙第二法）○・三以下
三號普通揮發油

本揮發油ハ左記揮發油八容ニ「アルコール」ニ容ヲ混合シタルモノタルベシ
右混合用油ハ水及沈澱物ヲ混ゼズ且左ノ各號ニ適合スルモノタルベシ

一、反 應（試験法第三號）申性

二、分溜性狀（試験法第一二號甲第一法）

一、一〇%溜出溫度 攝氏 一〇〇度以下

二、五〇%溜出溫度 攝氏 一六〇度以下

三、九〇%溜出溫度 攝氏 二一〇度以下

四、九七%溜出溫度 攝氏 二二五度以下

三、硫 黄（試験法第八號乙第二法）○・三以下

海軍諸例
則登載

達第三百四十九號

部外工場事業場管理規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十五日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第五條 監理官ノ名稱及管轄區域ハ左表ニ依ル

監理官ノ名稱	管轄區域
東京海軍監理官	東京府、神奈川縣（横須賀市地方、浦賀町地方ヲ除ク）千葉縣、埼玉縣、茨城縣、栃木縣、群馬縣、山梨縣、長野縣、福島縣、宮城縣、山形縣、岩手縣、秋田縣、青森縣
大阪海軍監理官	大阪府、京都府、滋賀縣、奈良縣、和歌山縣
神戸海軍監理官	兵庫縣、鳥取縣、島根縣（鎭川郡及飯石郡以東）、徳島縣、高知縣
長崎海軍監理官	長崎縣、熊本縣、鹿兒島縣、沖繩縣
名古屋海軍監理官	愛知縣、岐阜縣、靜岡縣、三重縣
浦賀海軍監理官	神奈川縣（横須賀市地方、浦賀町地方）

達

六九五

1719

室蘭海軍監理官	北海道、樺太
八幡海軍監理官	福岡縣(宗像郡、鞍手郡及田川郡以東)、大分縣、宮崎縣、山口縣(阿武郡、美禰郡、厚狹郡及宇部市以西)
廣島海軍監理官	廣島縣、山口縣(阿武郡、美禰郡、厚狹郡及宇部市以西ヲ除ク)、島根縣(簸川郡及飯石郡以東ヲ除ク)、愛媛縣
福岡海軍監理官	福岡縣(宗像郡、鞍手郡及田川郡以東ヲ除ク)、佐賀縣
玉海軍監理官	岡山縣、香川縣
富山海軍監理官	富山縣、石川縣、福井縣、新潟縣
京城海軍監理官	朝鮮
臺北海軍監理官	臺灣
旅順海軍監理官	關東州
備考	本表以外ノ地域ニ於ケル工場事業場ノ管理ヲ實施スル場合ノ監理官ノ名稱及管轄區域ニ付テハ必要ノ都度之ヲ定ム

(諸例則卷四、三五九頁參照)

海軍諸例
則登載

達第三百五十號

雇員傭人規則中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月十七日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第三條表中水栓手ノ項「館山砲術學校」ノ下ニ「吳海兵團」ヲ加フ

附則

本達ハ昭和十六年十一月一日ヨリ之ヲ適用ス

(諸例則卷二、七七九頁參照)

○正誤



昭和十六年達第二百七十五號別表臺灣總督府無線電信局略符號中「J F S 臺南」ハ「J F G 臺南」ノ誤

達

六九七

1721

海軍諸例
則登載

達第三百五十一號

海兵團練習部規則左ノ通改正ス



大正九年達不二四号

昭和十六年十一月十九日

海軍大臣 嶋田繁太郎

海兵團練習部規則

第一條 海兵團長ハ教務規程ヲ設ケ鎮守府司令長官ノ認可ヲ受ケ之ヲ實施スベシ但シ鎮守府司令長官ハ之ヲ認可スルニ先チ海軍大臣ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

第二條 新兵(四等軍樂兵ヲ除ク)ノ教育ハ横須賀第二海兵團練習部、大竹海兵團練習部、佐世保

第二海兵團練習部及舞鶴海兵團練習部ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ他ノ教育ハ特ニ規定スルモノノ外横須

賀第一海兵團練習部、吳海兵團練習部、佐世保第一海兵團練習部及舞鶴海兵團練習部ニ於テ之ヲ

行フ

第三條 海兵團長ハ各教育ノ終業期ニ於テ教官ヲ會同シ教育ノ經過、成績、進歩其ノ他關係事項ヲ

考查シ之ヲ記錄ヲ整理保存スベシ

第四條 海兵團長ハ新兵、准士官學生、軍樂術練習生、豫備練習生又ハ豫備補習生ノ終業期ニ於テ

達

六九九

1722

其ノ修業成績ニ意見其ノ他必要ナル事項ヲ附シ學業考課表ト共ニ之ヲ鎮守府司令長官ニ報告スベシ
 准士官學生修業報告ニ對シテハ鎮守府司令長官ハ更ニ意見ヲ附シ之ヲ海軍大臣ニ提出スベシ
 新兵又ハ練習生ノ修業又ハ卒業成績順序ハ何人中ノ何番ナル字句ヲ用ヒ之ヲ本人ノ考課調査表ニ
 記入スベシ

第五條 新兵、准士官學生及軍樂術練習生ノ修業期間ヲ左ノ如ク種別ス但シ時宜ニ依リ多少伸縮セ
 シムルコトアルベシ

新兵

志願兵 六月以内

普通科機雷術水中測的練習生、普通科信號術練習生、普
 通科電信術練習生、普通科工作術練習生又ハ普通科看護
 術練習生タルベキ者ハ三月以内

徴兵 五月以内

普通科機雷術水中測的練習生、普通科信號術練習生、普
 通科電信術練習生、普通科工作術練習生若ハ普通科看護
 術練習生タルベキ者又ハ師範學校出身ノ徴兵ハ三月以内

准士官學生

兵 科
 飛行科

整備科	六月以内
機關科	
工作科	
軍樂科	四月以内
看護科	四月半以内
主計科	
普通科軍樂術練習生	一年以内
高等科軍樂術練習生	二年以内
特修科軍樂術練習生	一年以内
第六條	海兵團長ハ新兵ニシテ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ修業期間内ニ教程ヲ終ヘザル者アルトキハ適宜其ノ修業期間ヲ延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ之ヲ鎮守府司令長官ニ報告スベシ
第七條	鎮守府司令長官ハ新ニ進級シタル在籍ノ各科准士官（選修學生及同教程修了者ヲ除ク）ニ學生ヲ命ズベシ
第八條	任務其ノ他特別ノ事情ニ因リ進級直後准士官學生タルコト能ハザル者アルトキハ所轄長ハ

達

七〇一

事由ヲ具シ速ニ在籍ノ鎮守府司令長官ニ報告又ハ通報スベシ
鎮守府司令長官ハ前項ノ場合ニ於テ事情已ムヲ得ザルトキハ之ヲ次期以後ニ延期シ又ハ准士官學
生ヲ命ゼザルコトヲ得

第九條 准士官學生ハ海兵團内ニ起臥セシム

第十條 海兵團長ハ准士官學生ニシテ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ同期學生ト共ニ修業セシムルコト能
ハザル者アルトキハ鎮守府司令長官ノ認許ヲ受ケ之ヲ次期學生ニ編入スルコトヲ得此ノ場合ニ於
テハ之ヲ海軍人事部長ニ通報スベシ

第十一條 海兵團練習部ニ於テ教育スル軍樂術練習生ヲ普通科軍樂術練習生、高等科軍樂術練習生
及特修科軍樂術練習生トス

四等軍樂兵及普通科軍樂術練習生ノ教育ハ横須賀第一海兵團ニ於テ、高等科軍樂術練習生及特修
科軍樂術練習生ノ教育ハ海軍軍樂隊東京分遣隊ニ於テ之ヲ實施スルモノトス

第十二條 普通科軍樂術練習生ハ新兵教程ヲ經テ新ニ進級シタル海軍三等軍樂兵ニ就キ横須賀第一
海兵團長之ヲ命ズ

第十三條 横須賀第一海兵團長ハ普通科軍樂術練習生ヲ命ジタルトキハ員數其ノ他必要ナル事項ヲ

横須賀鎮守府司令長官ニ報告スベシ

第十四條 高等科軍樂術練習生ハ海軍二、三等軍樂兵曹又ハ海軍一、二等軍樂兵ニシテ左ノ各號ニ該當スル者ノ中ヨリ之ヲ選拔ス

一 品行方正ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者

二 技術優秀且音樂上ノ理論ヲ修ムルニ適當ニシテ將來管樂、絃樂ノ教員ニ充テ又ハ各種奏樂指揮ノ職ヲ執ラシムルニ適スト認ムル者

三 普通科軍樂術練習生教程ヲ卒業シ其ノ特技章ヲ有スル者

第十五條 特修科軍樂術練習生ハ左ノ各號ニ該當シ且將來一隊ヲ指揮統制スルニ適スト認ムル者ノ中ヨリ之ヲ選拔ス

一 品行方正ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者

二 技術優秀且作曲理論等ニ對シ發展性大ニシテ將來幹部トシテ教育指導者タルニ適スト認ムル者

三 高等科軍樂術練習生教程ヲ卒業シ其ノ特技章ヲ有スル者

第十六條 普通科軍樂術練習生、高等科軍樂術練習生及特修科軍樂術練習生ニ採用スベキ員數ハ每

達

七〇三

1726

年二月一日以前ニ於テ海軍大臣之ヲ告達ス

第十七條 横須賀鎮守府司令長官ハ前條ノ告達ニ基キ翌會計年度中ニ於ケル普通科軍樂術練習生、

高等科軍樂術練習生及特修科軍樂術練習生ノ出入期日ヲ豫定シ毎年二月末日迄ニ之ヲ海軍大臣ニ報告スベシ

第十八條 高等科軍樂術練習生及特修科軍樂術練習生ヲ採用スルニハ横須賀鎮守府司令長官ハ其ノ候補者選出期限ヲ定メ艦船部隊長ヲシテ練習生志願者ニ就キ身體検査ヲ行ヒ第十四條又ハ第十五條ニ該當スル者ヲ選抜シ所見表(別表)ヲ添へ選出期限内ニ横須賀第一海兵團長ニ通知セシムベシ

横須賀第一海兵團長ハ更ニ選抜ヲ行ヒ其ノ採用候補人名及所屬ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ報告スベシ

横須賀鎮守府司令長官ハ前項ノ報告ニ基キ採用スベキ者ヲ決定シ入團期限ヲ定メ艦船部隊長ヲシテ期限内ニ入團セシムベシ艦船部隊長ハ其ノ出發前ニ於テ更ニ身體検査ヲ行ヒ不合格ノ者アルトキハ之ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ報告シ同鎮守府司令長官ハ補缺採用ノ手續ヲ行フモノトス

第十九條 横須賀第一海兵團長ハ高等科軍樂術練習生及特修科軍樂術練習生中左ノ各號ノ一ニ該當

スル者アルトキハ之ヲ免シ理由ヲ附シ之ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ報告スルト共ニ其ノ前所屬ノ艦船部隊長及横須賀海軍人事部長ニ通報スベシ

一 傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ卒業ノ見込ナキ者

二 修業成績不良ニシテ卒業ノ見込ナキ者

三 勤務怠慢品行不正ニシテ練習生タルニ不適當ト認ムル者

四 前各號以外ノ事由ニ依リ練習生タルニ不適當ト認ムル者

第二十條 横須賀第一海兵團長ハ前條第一號又ハ第四號ニ該當スル高等科軍樂術練習生又ハ特修科軍樂術練習生ヲ免ジタル場合ニ於テ入團後十日以内ナルトキハ横須賀鎮守府司令長官ニ補缺採用ノ手續ヲ請求スルコトヲ得

第二十一條 横須賀第一海兵團長ハ横須賀鎮守府司令長官ノ認可ヲ受ケ高等科軍樂術練習生及特修科軍樂術練習生ヲ官立音樂學校ニ委託シ修業セシムルコトヲ得

第二十二條 横須賀第一海兵團長ハ普通科軍樂術練習生ニシテ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ修業期間内ニ教程ヲ終ヘザル者アルトキハ適宜其ノ修業期間ヲ延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ之ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ報告スベシ

達

七〇五

1728

第二十三條 横須賀第一海兵團長ハ高等科軍樂術練習生及特修科軍樂術練習生中第十九條ノ規定ニ該當スルコトナク同期ノ練習生ト共ニ卒業セシムルコト能ハザル者アルトキハ之ヲ次期練習生卒業期迄ノ範圍ニ於テ適宜其ノ修業期間ヲ延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ之ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ報告スルト共ニ横須賀海軍人事部長ニ通報スベシ

第二十四條 所轄長ハ海軍特修兵令第六條ノ規定ニ依リ特技章ヲ觀齎シタルトキハ之ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ報告シ横須賀第一海兵團長ニ通報スベシ

附 則

本達ハ昭和十六年十一月二十日ヨリ之ヲ施行ス

本達施行ノ際現ニ修業中ノ左ノ上欄ニ掲グルモノハ夫々之ヲ本達ニ依ル其ノ相當下欄ノ練習生トス

軍樂術補習生	普通科軍樂術練習生
特修科軍樂術練習生	高等科軍樂術練習生
軍樂術特修兵ニシテ官立音樂學校ニ委託修業者	特修科軍樂術練習生

從前ノ規定ニ依リ左ノ上欄ニ掲グルモノハ夫々之ヲ本達ニ依ル其ノ相當下欄ノ練習生教程ヲ卒業シ

1729

タルモノト看做ス

軍樂術補習生教程ヲ終了セル者	普通科軍樂術練習生 <small>(特別ノ者ヲ除ク)</small>
軍樂術特修兵 <small>(官立音樂學校ニ委託セル者ヲ除ク)</small>	高等科軍樂術練習生
軍樂術特修兵中官立音樂學校ニ委託修業セル者	特修科軍樂術練習生

附則

第二第三項ハ昭和十六年十二月^(十五)日ヨリ之ヲ施行ス

(別表一葉添)

(諸例則卷一、三六四頁参照)

達

七〇七

1730

海軍諸例
則削除

達第三百五十二號

従前ノ規定中要港部トアルハ警備府、要港部司令官トアルハ警備府司令長官トス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

達第三百五十三號

海軍望樓規則ハ之ヲ廢止ス



明治三十五年達一四七号

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

(諸例則卷一、四〇九頁参照)

海軍諸例
則登載

達第三百五十四號

鎮守府處務規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

達

七〇九

1732

海軍諸例
則登載

達

七〇

第十六條第十號中「運輸及望樓」ヲ「及運輸」ニ改ム

(諸例則卷一、一五五頁参照)

達第三百五十五號

海軍各廳處務通則中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第四條第二項「鎮守府又ハ要港部ニ於ケル通信擔任參謀」ヲ削ル

(諸例則卷一、七〇七頁参照)

1733

達第三百五十六號

海軍通常物品會計規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第二表通常物品出納命令官以下區分表第八號經理部ノ項中品名ノ欄「鎮守府又ハ要港部所在」ヲ

「鎮守府又ハ警備府所在地ニ在ル」ニ改ム

同表第二十三號中「旅順要港部」ヲ「旅順警備府」ニ、「所屬物品」ヲ「所屬物品、旅順所在各廳

廳費所屬物品及他ノ主管ニ屬セザル物品」ニ改ム

同表備考中第四號ヲ左ノ如ク改ム

四、警備府所在地ニ在ル各廳ニ在リテハ特定ムルモノノ外廳長ヲ出納命令官トス

(會計法規類集四卷五百參照)

達第三百五十七號

海軍兵備品會計規程中左ノ通改正ス

達

七一

1734

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

別表艦營需品、燃料及糧食^{戰用糧食}ノ項出納命令官ノ欄「旅順要港部主計長」ヲ「旅順警備府主計長」

ニ、會計官吏ノ欄「※主計科士官タル旅順要港部部員」ヲ「※主計科士官タル旅順警備府部員」ニ改ム

同表兵器及艦營需品ノ項海兵團ノ兵備品取扱主任中「砲術長」ヲ削ル

同表兵器ノ項兵備品取扱主任ノ欄中「要港部」〔後任參謀 機關科士官タル要港部部員〕ヲ「警備府」〔後任參謀 機關科士官タル警備府部員〕ニ改ム

同表艦營需品及燃料ノ項兵備品取扱主任ノ欄中要港部ノ行ヲ削ル

同表港用品ノ項兵備品取扱主任ノ欄「要港部港務部勤務ノ要港部附兵科特務士官」ヲ「警備府港務部勤務ノ警備府附兵科特務士官」ニ改ム

同表備考第五號中「要港部」ヲ「警備府」ニ改ム

(會計法規類集四卷一三二頁參照)

海軍諸例
則登載

達第三百五十八號

海軍官印規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第三條中「旅順要港部主計長」ヲ「旅順警備府主計長」ニ、「旅順要港部港務部長」ヲ「旅順警備府港務部長」ニ改メ「旅順要港部工作部長、旅順要港部病院長」ヲ削ル

(會計法規類集四卷四三頁参照)

達第三百五十九號

患者携有物品保管手續中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第二條中「要港部病院」ヲ削ル

第一表患者携有物品出納監督官、保管主任表中要港部病院ノ項ヲ削ル

(會計法規類集四卷二二頁参照)

達

七三三

1736

達第三百六十號

海軍戰利品取扱規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

「要港部司令官」ヲ「警備府司令長官」ニ改ム

第五條中「要港部經理部長又ハ要港部主計長」ヲ「又ハ警備府主計長」ニ改ム

別紙様式中「(何要港部司令官)」ヲ「(何警備府司令長官)」ニ改ム

(會計法規集四卷九九頁參照)

1737

海軍諸例
則登載

達第三百六十一號

明治四十二年達第六十九號中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

小松島灣ノ項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

下關海峽北東海面 觀音埼ト蓋井島南端トヲ連結スル線以南、蓋井島南端ト藍ノ島北東端トヲ連結スル線以東及藍ノ島北東端ト黒埼トヲ連結スル線以北ノ海面

(諸例則卷三、三三八頁參照)

達第三百六十二號

海軍會計規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第十二條ノ二中「要港部司令官」ヲ「警備府司令長官」ニ改ム

達

七二五

1738

別表第四(甲) 中海軍經理部(鎮守府所屬)長、海軍經理部(要港部所屬)長ノ各項ヲ左ノ如ク改

海軍經理部(鎮守府所屬)長	海軍經理部部員	鎮守府各廳、所管艦船部隊(大湊、鎮海、馬公、大阪警備府所屬艦船部隊ヲ除ク)及管區内ニ在ル警備府(大湊、鎮海、馬公、大阪警備府ヲ除ク)學校ノ收入
海軍經理部(警備府所屬)長	海軍經理部部員	警備府各廳、所屬艦船部隊ノ收入

別表第四(乙) 中海軍經理部長ノ項、經費區分ノ欄「要港部」ヲ「警備府」ニ改メ、旅順要港部主計長ノ項ヲ左ノ如ク改ム

旅順警備府主計長	旅順警備府部員タル主計科士官	
病院	警備府	警備府ノ經費(以下特ニ定メタルモノヲ除ク)
	工作部	造船費、造兵費
患者費		

別表第四(丙) 中支出官ノ欄「海軍經理部(要港部所屬)長」ヲ「海軍經理部(警備府所屬)長」ニ、「旅順要港部主計長」ヲ「旅順警備府主計長」ニ、資金前渡官吏ノ欄「旅順要港部主計長」ヲ

「旅順警備府主計長」ニ、資金區分ノ欄「要港部所屬艦船部隊」ヲ「警備府所屬艦船部隊」ニ改メ
備考二「旅順要港部部員」ヲ「旅順警備府部員」ニ改ム

達第三百六十三號

海軍會計監督規程中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第一條中「要港部」ヲ「警備府」ニ、「要港部所屬」ヲ「警備府所屬」ニ改ム

第五條、第六條及第十一條中「要港部主計長」ヲ「警備府主計長」ニ改ム

第六條中「要港部所屬各部」ヲ「警備府所屬各部」ニ改ム

第八條 出納官吏轉免、死亡、退職其ノ他異動アリタルトキハ左ニ掲グル検査員之ガ帳簿及金櫃ヲ

検査スベシ

一 經理部所在地又ハ其ノ隣接市町村ニ在ル各部(第二號ニ該當スル場合ヲ除ク) 經理部長

二 艦隊主計長ト同一地ニ在ル艦隊所屬各部 艦隊主計長

三 旅順ニ在ル各部 旅順警備府主計長

達

七二七

1740

達

四 前各號以外ノ各部

所 轄 長

所轄長ハ前項第一號乃至第三號ノ場合ニ於テハ検査ヲ要スル日時ヲ検査員ニ通知スベシ
第九條中「第三號」ヲ「第四號」ニ改ム

七一八

1741

海軍諸則
則登載

達第三百六十四號

昭和十五年達第二百八十九號中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十五日

海軍大臣 嶋田繁太郎

區分中通信諸裝置ノ部

有線電話裝置及電路

ヲ

有線電話裝置及電路
防空指揮通信裝置

ニ改ム

參照 昭和十五年達第二百八十九號ハ陸上部隊電氣無線及有線關係工事分擔區分ヲ定ムル件ナリ

達第三百六十五號

昭和十六年度ニ於テ建造ニ着手ノ潜水艦二隻及驅潜艇一隻ニ左ノ通命名ス

昭和十六年十一月二十五日

海軍大臣 嶋田繁太郎

吳海軍工廠ニ於テ建造

呂號第百潜水艦

呂號第百三潜水艦

達

七一九

1742

株式會社播磨造船所ニ於テ建造
第三十四號驅潜艇

達第三百六十六號

海軍工務規則中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十五日

海軍大臣 嶋田繁太郎

海軍諸則
則登載

第二十一條 海軍工作廳長部外ヨリ工事ノ指導又ハ技術者ノ養成ノ依頼ヲ受ケタルトキハ左ノ各號ニ依リ處理スベシ

- 一 工事ノ指導又ハ技術者ノ養成ヲ受託セルトキハ所屬長官及海軍艦政本部長又ハ海軍航空本部長ニ其ノ旨報告又ハ通報スルモノトス但シ重要ナルモノニ在リテハ實施要領ヲ附シ受託ニ付豫メ海軍艦政本部長又ハ海軍航空本部長ニ協議ノ上所屬長官ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス
- 二 工事ノ指導又ハ技術者ノ養成ヲ終了シタルトキハ其ノ結果ヲ所屬長官ニ報告スルト共ニ海軍艦政本部長又ハ海軍航空本部長ニ通報スルモノトス

前項第一號ノ規定ニ依リ工事ノ指導又ハ技術者ノ養成ヲ受託セル場合及前項第二號ノ場合ニ於テハ
旅順海軍工作部長ハ別ニ速ニ其ノ旨所管海軍經理部長ニ通知スルモノトス

(諸例則卷三、五六四ノ一頁參照)

達

七二一

1744

海軍諸例
則登載

達第三百六十七號

艦船淨罐劑使用規則左ノ通定ム

昭和十六年十一月二十九日

海軍大臣 嶋田繁太郎

艦船淨罐劑使用規則

第一章 總 則

第一條 本規則ハ艦船用淨罐劑ノ種別、成分、使用區分及使用標準ニ關スルコトヲ規定ス

第二章 種別及成分

第二條 艦船用淨罐劑ヲ炭酸ソーダ系淨罐劑及磷酸ソーダ系淨罐劑ノ二種トス

第三條 炭酸ソーダ系淨罐劑トシテハソーダ灰ヲ使用ス

第四條 磷酸ソーダ系淨罐劑トシテハ第三磷酸ソーダ及苛性ソーダヲ使用ス

第三章 使用區分

第五條 罐水トシテ水道水ヲ專用スル艦船及水道水ト蒸溜水ヲ混用スル艦船ニ在リテハ炭酸ソーダ系淨罐劑ヲ使用スルモノトス

達

七二三

1745

第六條 罐水トシテ蒸溜水ヲ専用スル艦船ニ在リテハ磷酸ソーダ系淨罐劑ヲ使用スルモノトス

第四章 使用標準

第七條 ソーダ灰及苛性ソーダハ罐水ノアルカリ度ヲ常ニ百萬分ノ一三〇乃至百萬分ノ二五〇ノ範圍ニ在ラシムル如ク使用スルモノトス但シ罐汽釀中ハ概ネ百萬分ノ二〇〇以下罐休止中又ハ滿水保護中ハ概ネ百萬分ノ二〇〇以上ニ保持スルモノトス

第八條 第三磷酸ソーダハ罐水ノ磷酸根濃度ヲ百萬分ノ一〇乃至百萬分ノ三〇ノ範圍ニ在ラシムル如ク使用スルモノトス

附 則

昭和十五年達第二百十六號ハ之ヲ廢止ス



(海軍諸例則卷三、五九〇頁參照)

海軍諸例

則登載

達第三百六十八號

海軍機關教範中左ノ通改正ス

昭和十六年十一月二十九日

海軍大臣 嶋田繁太郎

第三十一條第一號中「艦本式重油專燒罐三〇〇時間」ヲ

「艦本式重油專燒罐 炭酸ソーダ系淨罐劑ヲ使用スルモノニ在リテハ三〇〇時間

磷酸ソーダ系淨罐劑ヲ使用スルモノニ在リテハ六〇〇時間」ニ改ム

第三十二條第四號ヲ左ノ如ク改ム

四 淨罐劑ヲ使用スルトキハ沈澱物多キヲ以テ罐消火ニ際シテ比較的少量ノ吹出ヲ行フヲ可トス
又汽釀中ハ罐使用程度ニ依ルベキモ經濟燃焼度附近ニ於テハ毎十二時間ニ炭酸ソーダ系淨罐劑
ヲ使用スルモノニ在リテハ水面計約五種程度、磷酸ソーダ系淨罐劑ヲ使用スルモノニ在リテハ
水面計約二種程度ノ吹出ヲ行フヲ適度トシ汽釀中ノ罐ヲ繼火セル時ハ同程度ノ吹出一回ヲ行フ
ヲ可トス而シテ吹出弁ヲ啓開スルニハ短時間宛數回ニ亘リ行フヲ可トス

第三十三條 罐内部腐蝕豫防ニ關シテハ常ニ左ノ諸號ニ留意スルヲ要ス

- 一 罐水ニハ汽釀中ナルト使用休止中又ハ滿水保護中ナルトヲ間ハズ常ニ淨罐劑ヲ使用スルヲ要ス
- 二 淨罐劑ハ使用法適當ナラバ硬性湯垢ノ附着及罐内部腐蝕ヲ防止スル效果著シキモ使用過多ニ
陥ルトキハ高力汽釀時又ハ鹽分高キ場合ニ於テ沸溢ヲ助成シ易キ懸念アルト共ニ過少ニ偏スル

達

七二五

1747

トキハ硬性湯垢附着防止及防蝕上ノ效果不充分ナルヲ以テ之ガ使用ニ關シテハ常ニ慎重ナル注意ヲ拂フヲ要ス而シテ罐水ノ磷酸根濃度及アルカリ度ハ左表ノ範圍ニ保持スルヲ要ス

罐	狀	態	燐	酸	根	濃	度	ア	ル	カ	リ	度
汽	醗	中	百萬分ノ一〇乃至三〇		百萬分ノ一三〇乃至二〇〇		百萬分ノ二〇〇乃至二五〇					
使用休止中又ハ滿水保護中												

三 汽醗中ハ燃焼度ノ高低ニ應ジ罐内部水量ノ變化ヲ來シ從テ罐水ノアルカリ度ノ増減ヲ來スモノナルヲ以テ常ニ罐水採取時ノ燃焼度ト對比シ其ノ適否ヲ判定スルヲ要ス而シテ左ノ程度ノアルカリ度ヲ示ス場合ハ其ノ罐水アルカリ度ハ適度ナリトス

- 低燃焼度時 百萬分ノ百三十乃至百六十
- 中燃焼度時 百萬分ノ百五十乃至百八十
- 高燃焼度時 百萬分ノ百七十乃至二百

四 罐消火後罐水ノアルカリ度ヲ規定範圍ニ保持スル爲ニハ消火ニ際シ豫メ罐水ノ磷酸根濃度及アルカリ度ヲ左ノ程度ニ高メ置クヲ可トス

消火後使用水標準トスル場合 燐酸根濃度百萬分ノ三十

アルカリ度百萬分ノ二百乃至二百五十

消火後満水トスル場合 燐酸根濃度百萬分ノ三十

アルカリ度百萬分ノ三百

五 罐點火ノ際罐水ノアルカリ度ハ使用休止中又ハ満水保護中ノアルカリ度ノ儘ニテ點火スルモ
ノトス

六 淨罐劑ヲ使用セル罐水ヲ豫備水タンクニ落シ汽釀中再ビ之ヲ罐ニ給水スルトキハ罐水ノアル
カリ度ノ調節極メテ困難トナルヲ以テ排除スベキ罐水ハ之ヲ捨テ去ルヲ要ス

七 炭酸ソーダ系淨罐劑トシテソーダ灰ヲ使用スルハ之ニ依リ罐水ニアルカリ度ヲ適度ニ保タシ
メ罐内面ノ水酸化鐵防蝕皮膜ヲ保護スルト共ニ給水中ノ油分及鹽類ヲ化學的ニ變化セシメ以テ
油滓及硬性湯垢ノ附着ヲ防止セントスルモノニシテ之ガ使用ニ關シテハ左ノ諸項ニ留意スルヲ
要ス

イ 汽釀中罐水ノアルカリ度百萬分ノ十ノ不足ニ對シテハ罐水一匁ニ付十瓦ノ割合ニテソーダ
灰ヲ補給注入スルヲ適度トス

達

七二七

1749

ロ 罐水ヲ取換ヘ使用水準ト爲ス場合ハ罐水一匁ニ付三百瓦ノ割合ニテソーダ灰ヲ注入シ成ルベク速ニ使用壓力三十分間以上ノ試焚ヲ行フヲ要ス但シ二十四時間以内ニ點火スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

ハ 罐水ヲ取換ヘ満水保護法ヲ行フ場合ハ前項ト同様ノ割合ニテ罐満水量分ノソーダ灰ヲ注入シ成ルベク速ニ使用壓力三十分間以上ノ試焚ヲ行ヒ試焚中ノ罐水ノアルカリ度ヲ約百萬分ノ三百トナル如ク調節シ罐水ノ冷却スルヲ待ツテ満水トスルヲ要ス

ニ ソーダ灰ノ補給注入ハソーダ灰ヲ重量約十倍ノ水ニ溶解シタルモノヲ淨罐劑注入装置ニ依リ各罐別ニ注入スルヲ要ス已ムヲ得ザル場合ハ蒸氣ドラム潛孔又ハ満水弁ヨリ注入スルモノトシ主給水タンクヨリハ注入スベカラズ

ホ 罐水ノアルカリ度ノ計測ハ淨罐劑ヲ補給セルトキ吹出ヲ行ヒタルトキ等必要ニ應ジ之ヲ行フノ外左ノ標準ニ依リ行フヲ要ス

汽 釀 中 毎四時間一回

使用休止中 毎週一回

満水保護中 毎月一回

八、 磷酸ソーダ系淨罐劑トシテ第三磷酸ソーダ及苛性ソーダヲ使用スルハ第三磷酸ソーダヲ以テ
 有效ナル磷酸鐵ノ防蝕皮膜ヲ形成スルト共ニ硬性湯垢ノ附着ヲ防止シ苛性ソーダヲ以テ罐水ニ
 アルカリ度ヲ適度ニ保タシメ防蝕皮膜ヲ保護シ罐内部腐蝕及油滓ノ附着ヲ防止セントスルモノ
 ニシテ之ガ使用ニ關シテハ左ノ諸項ニ留意スルヲ要ス

イ、 汽釀中罐水ノ磷酸根濃度百萬分ノ十ノ不足ニ對シテハ罐水一匁ニ付三十五瓦ノ割合ニテ第
 三磷酸ソーダヲ補給シアルカリ度百萬分ノ十ノ不足ニ對シテハ罐水一匁ニ付六瓦ノ割合ニテ
 苛性ソーダヲ補給スルヲ適度トス

ロ、 硬性湯垢ノ附着セル罐ニ於テハ磷酸根ハ先ヅ湯垢ニ作用シ之ヲ軟化剝落セシムル作用アリ
 之ガ爲罐水ノ磷酸根濃度ハ低下スルヲ以テ屢計測ヲ行ヒ特ニ濃度ノ保持ニ關シ注意ヲ要ス
 已ムヲ得ズ水道水ヲ使用セル場合又ハ罐水ノ鹽分上昇セル場合ニ於テモ罐水ノ磷酸根濃度及
 アルカリ度ニ異狀ヲ生ズルヲ以テ注意ヲ要ス

ハ、 罐水ヲ取換ヘ使用水準ト爲ス場合ハ罐水一匁ニ付第三磷酸ソーダ百瓦苛性ソーダ八十瓦ノ
 割合ニテ注入シ成ルベク速ニ使用壓力三十分間以上ノ試験ヲ行フヲ要ス但シ二十四時間以內
 ニ點火スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

達

七二九

1751

ニ 罐水ヲ取換ヘ満水保護法ヲ行フ場合ハ罐水一匁ニ付第三燐酸ソーダ百二十瓦苛性ソーダ百七十瓦ノ割合ニテ夫々満水量分ヲ注入シ成ルベク速ニ使用壓力三十分間以上ノ試験ヲ行ヒ試験中ノ罐水ノ燐酸根濃度約百萬分ノ三十アルカリ度約百萬分ノ三百トナル如ク調節シ罐水ノ冷却スルヲ待ツテ満水トスルヲ要ス

ホ 淨罐劑ノ補給注入ハ第三燐酸ソーダ及苛性ソーダヲ各重量約十倍ノ水ニ溶解シタルモノヲ各別個ニ淨罐劑注入裝置ニ依リ各罐別ニ注入スルヲ要ス已ムヲ得ザル場合ハ蒸氣ドラム潛孔又ハ満水弁ヨリ注入スルモノトシ主給水タンクヨリハ注入スベカラズ

ヘ 罐水ノ燐酸根濃度及アルカリ度ノ計測ハ淨罐劑ヲ補給セルトキ吹出ヲ行ヒタルトキ等必要ニ應ジ之ヲ行フノ外左ノ標準ニ依リ行フヲ要ス

汽 釀 中 毎十二時間一回

使用休止中 毎週 一回

満水保護中 毎月 一回

第三十四條第一號ヲ左ノ如ク改ム

一 満水保護法ヲ行フニハ前條第四號ノ規定ニ依リ罐水ノ燐酸根濃度及アルカリ度ヲ調節シ罐水

達

七三一

ノ冷却スルヲ待ツテ満水シ空氣コックヨリ罐水噴出シ壓力計ニ加壓ノ微ヲ顯シタルトキ送水ヲ止メコックヲ閉鎖スルヲ要ス但シ過熱器ノ構成上假令満水ヲ行フモ尙過熱器内ノ一部ニ空氣ノ存在ヲ避クベカラザルモノニ在リテハ過熱器入口弁ヲ確實ニ閉鎖シ過熱器内ヲ努メテ乾燥状態ニ保持スルヲ要ス

1753